

幕末明治の写真師列伝 第八十九回 宮下欽 その十一

二昼夜にわたって激戦に参加した薩摩藩、須坂藩、椎谷藩の兵は、長岡城下の本営に戻り休息することになり、松代藩兵のみが村外に出て砲台構築作業にあたり、敵の再度の来襲に備えることとなった。そして思った通りこの工事中にも敵が来襲したが、松代藩兵は敵の近接を待って狙撃し、ついで砲撃も開始したため、敵も狼狽して敗走して行った。こうして堤防上に松代藩五番隊が砲台の守備にあたり、狙撃隊及び大砲隊はこことは別に砲台を設置して守備に就いた。

一方、同盟軍の方も前面に砲壘を築いて、日夜、激しく砲撃を行っていた。これにより長岡城下の中島、今町の征討軍は、長岡藩、会津藩などの猛攻にあい、苦戦していた。

5月29日、征討軍の諸藩は与板城下の官軍本営に次々と集結して、今後の作戦を協議することとなった。この時の協議の結果、各藩の兵は信濃川を背にして45里にわたって、以下の守備の陣を敷くこととなった。

東方面・上柳村	薩摩藩、与板藩
川袋村・脇川新田	大垣支藩、尾州藩、方義隊（越後の草莽隊）
原村	松代藩、須坂藩、富山藩、尾州藩、薩摩藩、長州藩
稻荷社裏	富山藩、須坂藩、与板藩、薩摩藩、長州藩
本与坂口	松代藩、須坂藩、飯山藩、富山藩、高田藩、与板藩、薩摩藩、長州藩
下町裏	長州藩、須坂藩
下町裏北山	松代藩、飯山藩、薩摩藩、長州藩、与板藩
兜巾堂山	長州藩、与板藩
与板城裏山	薩摩藩、与板藩
大阪塔婆	薩摩藩、長州藩
若野浦	飯山藩
一本松嶺	尾州藩
古城山	長州藩
陣ヶ嶺	松代藩、加州藩、長州藩
阿弥陀頼村	高遠藩
見楯山	長州藩
乙茂村	長州藩、加州藩
柿ノ木村	越前藩
日野浦村	長州藩、高遠藩

この陣の配置は、与板奪還を企てる同盟軍の攻撃に対抗するための防御線であった。同盟軍は時々襲撃してきたが、これに対して征討軍の各藩はこの防衛線に於いて、うまく交戦、撃退していた。

一方、長岡藩の河井継之助は、長岡城奪還のため牽制攻撃を随所で展開していた。征討軍の各所を攻撃することにより、征討軍を西走東奔させることにより征討軍がその防衛に専念させることを余儀なくせざるを得ない作戦である。

松代藩は5月24日の杉沢村での戦いより29日までの間は、長岡の東方地域の山際、栃尾の赤坂、杉沢村、堀溝、見附、小栗山、文納の部落に於いて、砲撃戦で同盟軍に多大の損害を与えていた。特に栃尾付近の赤坂、杉沢村は見附の東4キロの距離にある部落で、長岡城防衛にとっては極めて重要な地点のため、同盟軍と征討軍の両軍はこの地域の塩谷川北岸に於いて死闘を繰り返していた。しかしながらこの激戦で松代藩の損害は、与板原村に於いての五番小隊の小野小十郎、七番狙撃隊の林栄之進、七番狙撃隊の隊長家来・宮下銀平の、手負い3名だけであった。

6月1日、赤坂の守備についていた松代藩に対して、周辺を斥候していた兵より「賊兵数百名ばかりが、赤坂の北駒込と東方の大平村方面より我が軍の背後を暗夜奇襲する計画あり」との報告があった。このため松代藩兵は本道左側の山にいた兵を急遽、右側に移動して、本道に対して防衛の兵を再配置したが、その直後に砲隊の背後より同盟軍が攻撃を仕掛けてきたため、大砲護衛のため苦戦に陥ってしまった。

これに対して薩摩藩、長州藩の部隊が救援に来る。接近戦により同盟軍に打撃を与えるも、敵味方も判らないくらいの接近、白兵戦となった。この戦いで、同盟軍も刀で斬られた者、銃で撃たれた者も多く、その戦死者は50名余りであったという。この戦いで松代藩の損害は、兵糧運搬夫の宮下義市、弾薬運搬夫の西沢末吉、和田甚左衛門の3名と、六番小隊の野沢常治、轟喜十郎、七番狙撃隊の杉田芳太郎、弾薬運搬夫の千代蔵の4名であった。この日、大総督府により2回目の感状が松代藩に与えられた。

長岡藩の河井継之助は、長岡城奪還のため5月30日に同盟軍を率いて加茂を出発した。征討軍牽制の軍と主力軍、別動隊の三軍は、加茂より三条を経て今町に進撃して前進する。主力軍は河井継之助指揮する三小隊と砲2門、左翼別働軍は山本帯刀指揮する三小隊と砲2門、右翼牽制軍は三小隊（指揮官不明）であった。

6月1日、連日の豪雨のため河川が氾濫し、各所の堤防も決壊して、道路は一面泥濘のためその進軍は進まず、同日夕刻に江口村付近によりやく着いて、明日の総攻撃に備えることになった。

6月2日、当初の予定通りに長岡藩を主力軍として、これに会津藩兵、翔鋒隊を加えて前面の征討軍に対して総攻撃を行った。今町付近の征討軍は指揮官不在の高田藩、尾州藩、上田藩、方義隊（越後の草莽隊）の各一小隊だけであったため、この総攻撃を支えることもできず、夕刻には押切方面の刈谷田川の線まで後退した。これにより、長岡藩軍は戦略要点である見附付近の今町を占領するという大戦果を挙げることができた。これは河井継之助が征討軍の防衛脆弱な場所である今町を攻撃に選んだ戦術眼のよさと、今町を防衛する征討軍の諸藩の兵を指揮する地区司令官がいなかったことによる。またこの時、越後軍司令部も黒田参謀が罹病により休んでいたため、山縣一人のみであったからだともいう。

（森重和雄）